

## ドイツ語における 自動詞と接頭辞 be- の関係について

野 上 さ な み

### 1. はじめに

ドイツ語では、一定の条件を満たす他動詞に接頭辞 *be-* を付加すると、いわゆる *Lokativalternation* と呼ばれる名詞句の交替現象を伴って新しい他動詞<sup>註1)</sup> を生成することができる。この接頭辞が付加される対象を「基本動詞」、それによって出来上がる複合動詞を「*be-*動詞」と呼ぶことにする。接頭辞 *be-* 付加の対象となるのは他動詞だけでなく、自動詞さらには名詞や形容詞からも数多くの *be-*動詞を作ることができる。本論では、これまであまり詳しく研究されてきていない自動詞を基本動詞とする *be-*動詞に焦点をあてる。まず第2節で、他動詞から *be-*動詞が派生する場合の意味論的条件を先行研究にも言及しながらまとめ、第3節で、自動詞から *be-*動詞が派生する場合の条件を明らかにし、意味論的条件が統語的条件よりも優先される形で、唯一の項のポジション移動を伴ってでも他動詞化が行われ *be-*動詞が成立することを示す。

### 2. 他動詞と接頭辞 *be-*

基本動詞では、移動を被る項 *THEMA* が直接目的語として現れ、*THEMA* の移動の終着点となる項 *LOKATIV* が前置詞句内に現れるのに対して、接頭辞の付加によってできる *be-*動詞では、この二つの項の間に交替が起こり、*LOKATIV* が直接目的語として、*THEMA* が前置詞句内に現れる<sup>註2)</sup>。動詞 *gießen/begießen* の間に起こる *Lokativalternation* を示したものが例文(1)①・②である：

- (1) ① Maria goss Wasser *THEMA* auf die Blumen *LOKATIV*.  
 ② Maria begoss die Blumen *LOKATIV* mit Wasser *THEMA*. マリアは花に水を注いだ。

他動詞にこの接頭辞が付加される場合の決め手となっているのは、他動詞の項が移動・変化を被る際の *Inkrementalität* (漸次性)である。つまり、この性質がどの項に属するのかわかると *be-*動詞の生成が左右される (Rapp(1997), Brinkmann(1997))。例えば、(2)①・②の基本動詞 *spritzen* (ふきつける)・*streuen* (撒く)の *THEMA* に当たる直接目的語名詞句は、動詞が表す出来事の進行に伴って自分自身が少しずつ、すなわち漸次的に移動を被るタイプの項である。いずれの動詞も、*Farbe* (塗料)・*Samen* (種)という *THEMA* が出来事の進行に伴って、部分的に少しずつ移動を被る。



### 3. 自動詞と接頭辞 *be-*

自動詞にこの接頭辞が付加されて出来上がる複合動詞の大部分が他動詞なので<sup>註3)</sup>、この接頭辞を他動詞化のプロセスを起こす接頭辞として捉えることを考察の前提とする。自動詞において前置詞句内にあった名詞句は、この接頭辞による他動詞化に伴って、他動詞の直接目的語となる。まず基本動詞となる自動詞を、非能格動詞・非対格動詞の二つに分類し<sup>註4)</sup>、各タイプの統語的構造を示すと(6)のようになる:

- (6) 非能格動詞:  $NP_X (\cdots V)$   
非対格動詞:  $e (NP_X \cdots V)$

ではまずどちらの自動詞群の統語的構造が、他動詞化をより受け入れやすいのかを考えてみたい。まず、非能格動詞を他動詞化するには、直接内項のポジションがあらかじめ空いているため、そこに新しく項を迎え入れることで他動詞化がスムーズに行われると考えることができる。しかし、非対格動詞を他動詞化しようとする場合には、直接内項である  $NP_X$  をわざわざ外項ポジションへと移動させて主語名詞句としなければ、新しい項を直接目的語として迎え入れることはできないので、非能格動詞の場合に比べると、それだけ統語的な負担が余分にかかると考えることができる。これに従うと、接頭辞 *be-* による他動詞化の場合にも、非対格動詞よりも非能格動詞の方が有利であると考えられる。その根拠となる、一連の統語的操作を(7)に示す。接頭辞 *be-* の付加によって新たに直接内項となる名詞句を太字で、動詞句の外へ移動しなければならない名詞句を網掛けで記す:

- (7) 非能格動詞:  $NP_X (\cdots V)$   
*be*-動詞:  $NP_X (NP_Y V)$   
非対格動詞:  $e (NP_X \cdots V)$   
*be*-動詞:  $NP_X (NP_Y V)$

非能格動詞を基本動詞とする場合、空いている直接内項のポジションに、基本動詞で前置詞句内に現れる名詞句  $NP_Y$  を入れるという、動詞句内部の統語的操作で他動詞化が行われる。これに対して基本動詞が非対格動詞である場合、 $NP_Y$  を直接内項として受け入れるために、すでにそのポジションを占めている  $NP_X$  を動詞句の外部に移動させるという余分な作業が必要となる。

#### 3.1. 自動詞への接頭辞 *be-* 付加の条件

では実際に、この接頭辞の付加によって成立する複合動詞の例をもとに、自動詞の統語構造が接頭辞付加にどのような影響を及ぼすのかを確認しておこう。基本動詞が非能格動詞である場合と非対格動詞である場合とに分けて例を見てみることにする。非能格動詞からは、(8)のように接

頭辞を付加して *be-*動詞が出来上がるのに対して、非対格動詞に接頭辞 *be-*を付加しても、(9)に見られるように文が成立しない:

- (8) ① Die Insekten kriechen auf der Hütte. → Die Insekten bekriechen die Hütte.  
虫が小屋を這い回っている。
- ② Man fliegt auf der Strecke oft. → Man befliegt die Strecke oft.  
この路線は就航が多い。
- ③ Der Verfasser arbeitet am Roman. → Der Verfasser bearbeitet den Roman.  
作家はその小説に従事している。 作家はその小説に手を入れている。
- (9) ① Der Ball rollte im Garten. → \*Der Ball berollte den Garten.  
ボールが庭の中を転がった。
- ② Die Blätter schweben in der Luft. → \*Die Blätter beschweben die Luft.  
葉っぱが空中を漂っている。
- ③ Der Fluss fließt in diesem Land. → \*Der Fluss befließt das Land.  
川はこの国を流れている。
- ④ Die Suppe kleckerte auf die Decke. → \*Die Suppe bekleckerte die Decke.  
スープがテーブルクロスの上にこぼれた。
- ⑤ Der Wein tröpfelte auf den Tisch. → \*Der Wein betröpfelte den Tisch.  
ワインが机の上にたれた。

これらの例を一見した限りでは、非能格動詞にはこの接頭辞を付加して他動詞を作ることができるけれども、非対格動詞にはそれができない、と考えることもできる。しかし、非対格動詞の中にも、この接頭辞の付加を受け入れる自動詞がある:

- (10) ① Die Kinder gehen auf dem Eis. → Die Kinder begehen das Eis.  
子供たちは氷の上を歩いている。
- ② Die Touristen stiegen auf den höchsten Berg des Landes.  
→ Die Touristen bestiegen den höchsten Berg des Landes.  
旅行者たちはこの国で一番高い山に登った。
- ③ Heuschrecken befielen den Westen des Landes.<sup>注5)</sup> イナゴが国の西部を襲った。

これら(10)の例から、この接頭辞の付加によって決定的な基準となるのは、非能格・非対格動詞の統語的構造の違いだけではないと言える。では、接頭辞 *be-*付加の決め手となる条件は何なのであろうか?

BRINKMANN (1997: p.187) は、動詞 *besteigen* に見られる意味論的制約を、主語となる項

の「有生・無生の区別」であるとし、人間が山登りをするケースでは動詞が有生のものの動きを表し、風船が空中を上昇するケースでは無生のものの動きを表すため、前者のみが動詞 *besteigen* の叙述対象になるとしている:

- (11) ① \*Der Luftballon 無生 bestieg die Luft. 風船は空中を上がっていった。  
 ② Der Mann 有生 bestieg den Berg. その男は山に登った。  
 BRINKMANN (1997: p.187): 下線部は筆者加筆

確かに *laufen*, *arbeiten*, *riechen* などのように、*be*-動詞そのものが成立するタイプの非能格動詞であっても、それは主語名詞句が有生の場合に限られており、主語名詞句が無生である用法にはこの接頭辞を付加することができない:

- (12) ① Die Leute laufen in der Stadt. → Die Leute belaufen die Stadt.  
 人々は街中を行き交う。 人々は街を(見物して)歩く。  
 ② Die Kerze lief auf den Tisch. → \*Die Kerze belief den Tisch.  
 蝋燭が机の上に流れた。  
 ③ Der Musiker arbeitete am Weihnachtslied. → Der Musiker bearbeitete das Weihnachtslied.  
 音楽家はそのクリスマス楽曲に取り組んだ。 音楽家はそのクリスマス楽曲を編曲した。  
 ④ Die Maschine arbeitete in der Fabrik. → \*Die Maschine bearbeitete die Fabrik.  
 機械が工場で作動していた。  
 ⑤ Der Hund riecht am verdächtigen Koffer. → Der Hund beriecht den verdächtigen Koffer.  
 犬は疑わしいトランクのにおいをかいでいる。  
 ⑥ Der Müll riecht in der ganzen Stadt. → \*Der Müll beriecht die ganze Stadt.  
 ごみの臭いが町中で漂っている。

*be*-動詞の成立・不成立が主語名詞句の意味論的性質に左右されるという特徴は、*be*-動詞の成立が確認できているタイプの非対格動詞についても同様に見られる:

- (13) ① Der Wanderweg geht zum Gipfel. → \*Der Wanderweg begeht den Gipfel.  
 ハイキングコースは頂上まで続く。  
 ② Das Fieber stieg auf 40 Grad. → \*Das Fieber bestieg 40 Grad.  
 熱が40度まで上がった。  
 ③ Der Blumentopf fiel auf die Straße. → \*Der Blumentopf befiel die Straße.  
 鉢が道路に落ちた。  
 ④ Die roten Zahlen wachsen in der Firma. → \*Die roten Zahlen bewachsen die Firma.

赤字がその会社で膨らんでいる。

しかし、*befahren* (走行する) のように無生の名詞句が主語となっているにもかかわらず *be-*動詞が成立するケースもある:

(14) ① Tanker können diese Route nicht befahren.

タンカーはこのルートを通ってはいけない。

② Fahrzeuge dürfen das Naturschutzgebiet nicht befahren.

乗り物は自然保護区を通行してはならない。

(14) のような例も含めて、この複合動詞の成立条件と主語名詞句の意味論的性質の関係を考えるならば、主語名詞句の「有生・無生」という二者択一的区別よりも、この名詞句が自分自身の行為・運動や叙述される出来事をコントロールする能力、またできない場合にはこのコントロール能力との密接度に応じて、接頭辞 *be-* による他動詞化の許容度が変化すると捉える方が適切であろう。他動詞化を受け入れない例文においては、主語名詞句と、叙述される出来事をコントロールするものが分離している、あるいは両者の密接度が低いと判断することができる。逆に他動詞化を受け入れている例文(14)は、主語名詞句の移動をコントロールする操縦者が、移動する対象である主語名詞句に常に随伴するというタイプの出来事を叙述している。このように、運動や行為をコントロールする能力を有する存在を *Protagonist* と呼ぶことにする。以上の考察から、自動詞を接頭辞 *be-* によって他動詞化するためには、完成する他動詞の主語となる名詞句が *Protagonist* であること、あるいはもしそうでない場合には、*Protagonist* との密接度が高いことを意味論的条件として満たさなければならない、と結論付けることができる。

自動詞と他動詞両方の機能を持つ動詞から *be-*動詞を作るケースも、この *Protagonist* の原則を証明する例として挙げることができる。他動詞の用法(15)②・④・⑥は主語名詞句が *Protagonist* であるために、問題なくこの接頭辞を付加して複合動詞を作ることができるけれども、自動詞の用法(15)①・③・⑤は、主語名詞句が *Protagonist* ではないために他動詞化が阻まれてしまう:

(15) ① Der Wein tröpfelte auf den Tisch.

→\*Der Wein betröpfelte den Tisch.

ワインが机にたれた。

② Hans tröpfelte den Wein auf den Tisch.

→ Hans betröpfelte den Tisch mit dem Wein.

ハンスがワインを机にたらした。

③ Die Tinte spritzte auf die Decke.

→\*Die Tinte bespritzte die Decke.

インクがテーブルクロスにはねた。

④ Er spritzte Tinte auf die Decke.

→ Er bespritzte die Decke mit Tinte.

彼はテーブルクロスにインクをはねかけた。



- (17) ① Ich befahre die Autobahn. 私はその高速道路を通行する。 軌道に漸次性  
 ② Ich befahre die Autobahn jeden Tag. 私は毎日その高速道路を通行する。 反復性  
 ③ Die Touristen befahren die Autobahn. 旅行者はその高速道路を通行する。 反復性  
 ④ Er betritt die Bühne. 彼は舞台へ上がる。 なし  
 ⑤ Er besteigt den Zug. 彼は列車に乗り込む。 なし

さらに、移動・運動以外を表す自動詞は THEMA に相当する項がそもそも存在しないケース (*lachen*:笑う→ *belachen*, *schreien*:叫ぶ→ *beschreien*, *lügen*:嘘をつく → *belügen*)である上に、これらの自動詞でも、項の漸次性やそれに代わる出来事の反復性は必須事項ではない。よって、自動詞にこの接頭辞が付加される際の意味論的条件には、項の漸次性および出来事の反復性は含まれていないと結論付けたい。

### 3.3. 統語的制約 vs. 意味論的制約

統語的構造を見るならば、他動詞化には不利な非対格動詞にさえも、接頭辞 *be-*の付加が可能であることがわかった。その場合、自動詞の唯一の項のポジションをわざわざ移動して新しい外項にすると同時に、その結果空いた直接内項のポジションに新しい直接目的語を迎え入れる。接頭辞 *be-*付加による他動詞化と、やはり他動詞化のプロセスの一つである、自動詞から「二項の結果相構造」を作る仕組みとを比較してみよう。まず結果相構造を作るための意味論的条件は、基本動詞となる自動詞の唯一の項である主語名詞句が Protagonist であるか、少なくとも知覚能力を持つことであった<sup>註6)</sup>。自動詞から二項の結果相構造を作る際の統語構造の変化とその例文を(18)に示す。統語的観点から見ると、非能格動詞では、外項である唯一の項がそのまま、新しくできる他動詞構造の主語名詞句として機能でき、項の移動を伴うことなく空いている直接内項のポジションに新しい項を迎え入れることができるので、二項の結果相構造の基本動詞となる:

- (18) ① 非能格動詞:  $NP_X (\dots V) \rightarrow NP_X (NP_Y^{Vf} (RP V))$  可能  
 ② 非対格動詞:  $e (NP_X V) * \rightarrow NP_X (NP_Y^{Vf} (RP V))$  不可能  
 ③ 非能格動詞: Der Großvater lief. 祖父が走った。  
 → Der Großvater<sub>X</sub> lief<sub>V</sub> sich<sub>Y</sub> müde<sub>RP</sub>. 祖父が走ってくたびれた。  
 ④ 非対格動詞: Der Großvater starb. 祖父が亡くなった。  
 → \*Der Großvater<sub>X</sub> starb<sub>V</sub> alle Verwandten<sub>Y</sub> traurig<sub>RP</sub>.  
 祖父が亡くなって親戚皆が悲しんだ。

一方非対格動詞は、唯一の項が動詞の直接内項ポジションを占めているため、新しい他動詞構造の主語名詞句となることができず、新たな直接内項としての直接目的語も迎え入れることがで



きない。つまり非対格動詞からは「他動詞としての結果相構造」を作ることができない、という統語的制約がある<sup>7)</sup>。すなわち、結果相構造を作る際には、唯一の項のポジション移動そのものが許されず、意味論的な条件が整っていてもこの統語的な制約ゆえに、非対格動詞の他動詞化は阻まれていた。よって接頭辞 *be-* の付加に比べると、統語的制約がより強く働くタイプの他動詞化であると言える。

接頭辞 *be-* を付加する場合においては、非対格動詞の唯一の項を動詞句の外へと移動させてでも、他動詞化を実現しようとする力があることが確認できた。つまり結果相構造を作る際の他動詞化に比べると、統語的制約がやや弱いと言える。ただし、*be-* 動詞の主語名詞句は *Protagonist* であるか、それとの密接度が高いものでなければならない、という意味論的条件があるため、項の移動が許されるのもこの条件を満たしている場合に限られることは事実である。*Protagonist* である項は、みずからが出来事の起源となる能力を備える項であり、この性質は特定の項が備える「主体としての性質」の強さとして捉えることが可能である (DOWTY:1991)。HOPPER & THOMPSON (1980) は、項の主体能力 (Agency) の強弱が動詞全体の他動性 (Transitivity) を測るパラメーターの一つとして機能するという考え方を提案しており、これに従うと *Agency* の強さに比例して動詞全体の他動性も高まるということになる。

接頭辞 *be-* による自動詞の他動詞化というプロセスを、動詞の持つ「他動性」との関連でまとめると次のようになろう。この他動詞化は、単に一項の構造を二項の構造に統語的に変化させる、という一律的なプロセスではなく、基本動詞が一定の他動性を備えていなければ実現されないものである。この点は結果相構造を作る場合と接頭辞 *be-* を付加する場合の両方に共通している。接頭辞 *be-* による他動詞化は、結果相構造の生成という他動詞化プロセスに比べると、統語的制約よりも意味論的条件が優先される度合いが高い他動詞化のメカニズムであると結論付けることができる。自動詞に接頭辞 *be-* を付加する際の統語的操作用と項の意味論的性質を (19) にまとめる。動詞句内に留まる項には特に意味論的制約が無いため単に NP とし、動詞句外へ移動する項に網掛けする：

- (19) 非能格動詞：  $NP_{AGENS} \text{ (} \overset{PP}{(NP)} V$   
*be-* 動詞：  $NP_{AGENS} \text{ ( } NP V$   
 非対格動詞：  $e \text{ (} \overset{PP}{(NP_{AGENS}} (NP) V$   
*be-* 動詞：  $\overset{PP}{(NP_{AGENS}} (NP V$

#### 4. 結論

自動詞への接頭辞 *be-* の付加は、他動詞化のプロセスの一つである。この他動詞化は、基本動詞が一定の他動性を備えている場合のみ実現される。この他動性は、*be-* 動詞の主語名詞句となるべき項に備わっている主体性の強さによって測られるものである。具体的にはこの項が *Protagonist* であるか、またそうでない場合には、この項と *Protagonist* との密接度が高い場合のみ、他動詞化が可能となる。自動詞から結果相構造を作る際の他動詞化では、統語的制約がより強く働くために、たとえ意味論的条件を満たしていても非対格動詞を他動詞化することが許されなかつ

たが、接頭辞 *be-* による他動詞化の場合には、唯一の項のポジション移動を行ってでも他動詞化が実現される例がある。つまり同じ他動詞化でも接頭辞 *be-* による他動詞化では、結果相構造を作るケースに比べると、統語的制約がやや弱いといえることができる。

## 5. 注

注1: 名詞句交替を起こす他動詞間の意味の差異を、Holistische Interpretation が適用される項の違いとして捉える研究が進むとともに、これに対する反論もある。詳しくは OLSEN (1995) や WUNDERLICH (1987) を参照。本論では接頭辞 *be-* の有無とこの解釈の関係については言及しない。

注2: 本論では、項の意味論的性質を示す「役割」を記述する際には DÜRSCHIED(1999) に従い、存在論的役割 (ontologische Rollen) を用いる。これにより、同一の対象を表す項の担う「役割」が、統語的条件や動詞との関係に応じて幾通りにも変化するのを避けることができる。

注3: 自動詞にこの接頭辞を付加した結果、やはり自動詞が出来上がるケースも無いわけではない。例えば、*beschimmeln* (カビる) など。

注4: 自動詞の分類は NOGAMI(2000)に従い、意味論的には唯一の項の『客体としての性質 (Patientivität) の高さ』を基準にして行う。

注5: 基本動詞 *fallen* に関しては、*befallen* の場合と同一の名詞句を構成要素とする文が成立しない：  
\**Heuschrecken fallen auf den Westen des Landes.* このペアの場合、基本動詞と複合動詞の間には明確な意味の差が存在し、*fallen* の「落下・下降」という移動の意味から離れて、「何かを襲う」という比喩的な意味が *befallen* に定着していることがその原因となっている。

注6: NOGAMI(2000:p.62) を参照。

注7: NOGAMI(2000:p.62-65) を参照。

## 6. Bibliographie

Brinkmann, U. (1997): *The locative alternation in German*. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.

Dowty, D.R (1991): Thematic proto-roles and argument selection. In: *Language* 67. p. 547-619.

Dürscheid, C. (1999): *Die verbalen Kasus des Deutschen*. Berlin, New York: Walter de Gruyter.

Hopper, P.J. & Thompson, S.A. (1980) :

Transitivity in grammar and discourse. In: *Language* 56-2. p.251-299.

Nogami, S. (2000) : *Resultativkonstruktionen im Deutschen und Japanischen*.

Frankfurt am Main: Peter Lang.

Olsen, S. (1995) : Lokativalternation im Deutschen und Englischen.

In: *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 13-2. p. 201-235.

Rapp, I. (1997) : Fakultativität von Verbarargumenten als Reflex der semantischen Struktur.

In: *Linguistische Berichte* 172. p.490-529.

Wunderlich, D. (1987): An investigation of lexical composition: the case of German *be-*verbs.

In: *Linguistics* 25. p.283-331.